
マヨナカカプセル*

緋蜂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マヨナカカプセル*

【Nコード】

N3938Q

【作者名】

緋蜂

【あらすじ】

修学旅行まであと一ヶ月。
クラスの問題児を集め、学級委員長はタイムカプセルを提案する。
それは『卒業』する為の試験。
誰もが戸惑い、立ちすくむ人生の交差点で、俺達は『一番大切なもの』をそのカプセルに詰め込む。

これは朝の来ない学校が始まる、一つの青春群像劇。

1（前書き）

別のサイトに、別の名前で掲載しているものの再掲です。
タイトル等を変更しております。

好きなことを好きなだけやっている人生だった。

『人生だった』なんて言うのと爺臭いけど、実際俺の人生は我侭放題し放題で、一人っ子だった俺は極限まで甘やかされて育った。それは高校という人生の大舞台でも同じことで、俺は俺らしく、実に有意義な日々を過ごしていた。

付け入る隙もないほど、充実した毎日。事件も起こらず、平和で、気の会う仲間達と過ごす時間。ずっと続きそうで、誰もがすぐに終わると思っている、特別。

かけがえのない、これが青春ってやつだと、頭では理解していた。

期末テストも終わり、腑抜けていたクラスがいつの間にやら立ち直って、あの騒乱が始まったのは、大体今から2ヶ月くらい前のことだった。

その浮かれっぷりといったら、成績の上下差が激しいこのクラスが一丸となってしまうくらいのもので、ある意味格差平等、男も女も馬鹿も天才も関係なく踊り騒ぐ狂乱という有様だった。そう、このクラス、どこよりもノリだけはいいのだ。

そんなわけで、俺たちは2ヶ月も早くお祭り騒ぎに向けてそわそわし始めていた。祭りというのは文字通りの意味じゃなく、一応『修学旅行』と名のついた立派な勉学の場合んだけど、勉強のために旅行に行く奴なんて一人もない。皆ガキみたいに浮かれはしゃいでいる。

だがそこは哀しいかな、思春期の性^{さが}。男子は

「修学旅行？ かつたりい、誰が好き好んで行くんだよ。つまんね

ー田舎に金払って。」

といい、女子は女子で

「どーせならメモリーランドに行きたかったなあ。あ、隣のメモリ

ーシーでも良かったのに。今あそこのキャラ、期間限定の可愛いお土産があつてさあ・・・」

という具合で、誰もが口に出して修学旅行を楽しみにしている、なんて言わなかった。素直になれないお年頃というわけだ。だがそんなこと、一々口に出して言わなくても、俺たちが死ぬほど修学旅行を楽しみにしていたのは事実だし、この修学旅行が特別な意味を持つだろうということも、皆承知していた。修学旅行が終われば、直に受験シーズン。俺たちは先輩達の背中を見ながら、自分の進路を決める時期に来ていた・・・。

「複雑よねー。」

と、机に座って、ため息をついたのは鹿嶋七。かしまなないつもは元気なこの少女も、今日ばかりは緋色の夕暮れに哀愁をそそられたのか、ぼんやりと空を見つめていた。だからと言って机に座るのはどうかと思うが。

「複雑？」

俺は書きかけのプリントから目を離して、憂う少女に目をやった。「なんかさー。みんな、先に進みたくないんだけど、先に進んじやつてるといつか。人生のレールつてやつ？不可抗力みたいな。」

「よくある話だな。それで？七はそのレールが気に食わないってか？」

「気に食わないってわけじゃないけど・・・。」

風になびくショートカットの髪を、軽やかきあげる。無言のままの七が見つめる空を、俺もつられてぼんやり見た。

七はその先を言わない。俺も沈黙のうちに空を見上げて、なんとなく、七の言った「複雑」とやらを考えていた。

始業のベルが気だるげに鳴ると、子リスのような佐倉志乃さくらしのが机の間を動き回り、プリントを配った。どうやら一時限目は抜き打ちテストになったようだ。

「えー、いきなりました？」

大人顔負けの澄んだ声で、水倉壱帆みなぐらいちほが言った。

「では皆さん、制限時間30分でミニテストを開始します。何かわからないことがあった時は、私か志乃さんに言ってください。」
 有無を言わさない流れ。これこそが、この無法地帯と化したクラスを腕一つでまとめあげた敏腕学級委員長、壱帆の実力だ。それが例え予定にないテストであつたとしても、ミスひとつなく実行してみせる。

俺としては文句たらたらなのだが、ここで逆らってはどいう目に合うかわかったもんじゃない。例えどんなに点数が低かるうが、ここは大人しくテストを解いたほうが身の為というものだ。

「ちなみに、今日の一時限目はこのテストだけです。解いた人はプリントを提出後、静かに自習してください。」

…さすがは敏腕学級委員長壱帆。飴と鞭を完璧に使いこなしている。最早これでテストに文句をつける奴は、俺を含めていなくなつたも同然だ。後で点数の低さから後悔するのはわかつているが、20分の自由時間というのは後悔を補つて余りある魅力がある。

俺は極普通にペンを取り、問題を解き始めた。

…と。

開始早々寝ている奴がいた。

顔なんて見なくても誰だかわかってしまう自分が嫌だ。

そいつは始業の合図があつたと同時に机に突っ伏し、健やかないびきを立て始めた。信じられない無神経さだ。無神経と言うよりは…ただの馬鹿か？

もちろんそんな馬鹿を、学級委員長が見逃すはずもなく。

「……小柴君？小柴虎太君？」

ゆさゆさゆさ、とあいつ——小柴の肩をゆする。それにあわせて、短い茶髪がリズムカルに揺れた。

「うーん、もうちょつとー。あと5ふぐえっ」

虎太が全て喋ることは許されなかった。有無を言わせない力で戯けた寝言は封殺され、委員長は何事もないかのようにクラスを見渡した。

「……はい、始めてください。」

俺を含めた生徒は、どこから取り出したのか納豆を口に詰め込まれた虎太を、可哀想なものを見る目つきで見、そつと目を逸らした。納豆嫌いの虎太は半分白目をむいて泡を吹いている。ご愁傷様だが、自業自得だ。

ふと見上げると、小動物のような目と視線が合った。志乃がオロオロと俺に助けを求めているので、俺は黙って志乃からプリントを取り上げ、虎太と机の間にねじ込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3938q/>

マヨナカカプセル*

2011年1月28日12時02分発行